

平成23年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 カタクチイワシ

学名 *Engraulis japonicus*

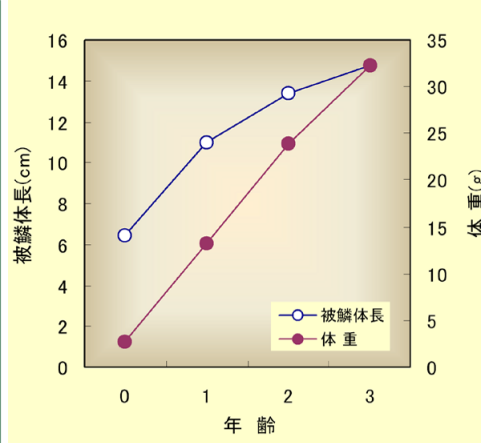
系群名 太平洋系群

担当水研 中央水産研究所



生物学的特性

寿命: 4歳
成熟開始年齢: 1歳(100%)
産卵期・産卵場: 冬季を除くほぼ周年で4～7月が盛期、沿岸～沖合の広い海域
索餌期・索餌場: 周年、九州～北海道の太平洋沿岸、黒潮域、黒潮続流域、黒潮親潮移行域、親潮域、東は経度170度付近の海域まで
食性: 動物プランクトン等
捕食者: 中大型の浮魚類、鯨類

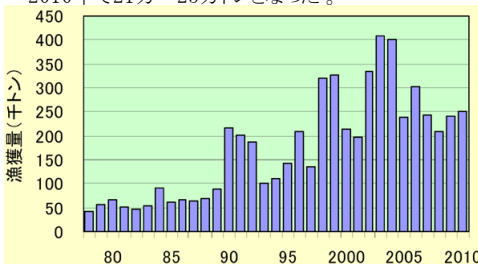


漁業の特徴

常磐以南でシラス船曳網等により春から秋までシラスとして漁獲される。未成魚・成魚の漁場の中心は常磐～房総の沿岸で、まき網による漁獲が多く、沿岸の定置網等でも漁獲される。常磐・房総の大中型まき網の漁期は12～6月である。資源量が多い年には9～11月に道東から三陸、1～5月に熊野灘や日向灘でも多獲される。黒潮・親潮移行域に分布する魚群はほとんど漁獲対象となっていない。

漁獲の動向

1989年まで数万トンで推移していたが、1990年に太平洋北区で急増し20万トンを超えた。その後の漁獲量は、年変動が激しいものの概ね増加傾向であり、2003年には過去最高の41万トンとなった。漁獲量はその後減少し、2007～2010年で21万～25万トンとなった。

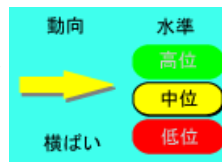


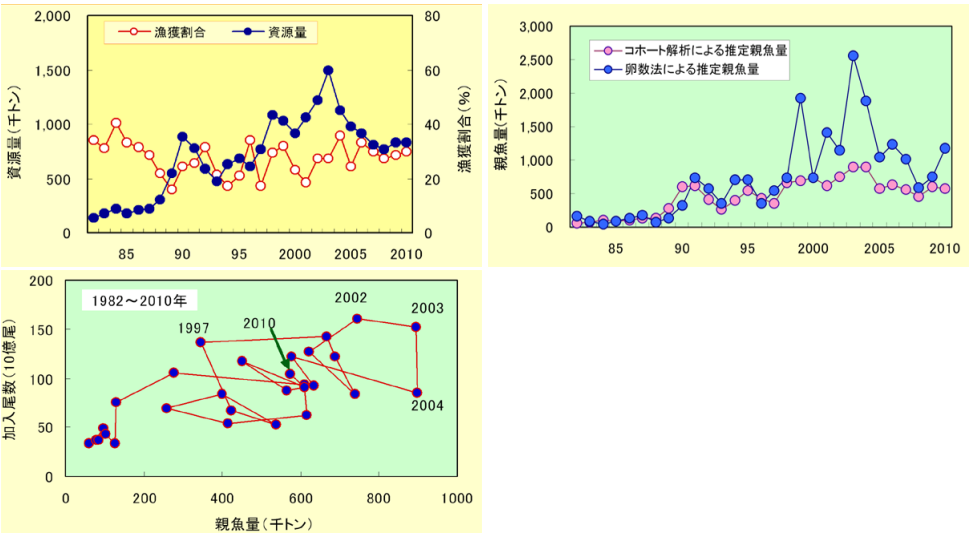
資源評価法

年齢別漁獲尾数に基づくコホート解析による資源量推定を基本としたが、高水準期に分布が沖合に拡大するにもかかわらず漁場は沿岸域に限られるため、漁獲情報に依存した手法のみでは資源の動向を見誤る可能性がある。このため、漁場域より広範囲で行われている産卵調査結果を基に卵数法により親魚量を推定し、コホート解析による推定親魚量と比較するとともに、常磐房総沖における計量魚探調査結果も水準判断の参考値とした。

資源状態

卵数法での推定親魚量は2010年で117万トンとなり、過去10年の中で中程度の水準であった。常磐房総沖の計量魚探調査の結果では、近年は沖合域への分布拡大・縮小の変動が大きく、推定現存量は2003年以降顕著に減少している。コホート解析による推定資源量は最近20年は変動が大きいながらも増加傾向であったが、2003年(149万トン)をピークに減少傾向となり、2007～2010年で77万～84万トンと推定された。





管理方策

現在の親魚量は再生産関係から見て良好な加入を期待できる親魚量の閾値 (Blimit: 13 万トン) より十分に高く、再生産関係が利用可能であることから、管理基準として「平成23年度ABC算定のための基本規則」の1-1)-(1)を用いた。漁獲の主対象となる1 歳魚の漁獲係数を管理指標値とした。再生産関係における中央値に相当する漁獲係数Fmedであれば資源の現状を維持できると考え、Flimit = Fmedの時の漁獲量をABClimit、Ftarget = Flimit × 0.8の時の漁獲量をABCtargetとした。

	2012年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	227千トン	Fmed	1.06	28%
ABCtarget	202千トン	0.8Fmed	0.84	25%

- F値は漁獲の主対象群となる1歳魚の漁獲係数

資源評価のまとめ

- 本系群の資源水準は中位であるが、親魚量はBlimitより十分に高く、漁獲が資源に悪影響を与えている状態にはないと考えられる
- 漁場外の分布量は2003年以降大きく減少していることに留意する必要がある

管理方策のまとめ

- 現状の漁獲圧(最近5ヶ年の平均のF=1.23)はFmed (F=1.06) より高いが、資源を大きく減少させるものではない
- 現状の漁獲を維持しても漁獲が資源に与える悪影響は少ないと考えられる

執筆者: 久保田洋・阪地英男・高須賀明典・宇田川美穂・川端 淳・赤嶺達郎

資源評価は毎年更新されます。